

博士学位論文審査要旨

2010年 2月27日

論文題目： 初期アウグスティヌス思想における宗教的探求の問題

学位申請者： 岡寄 隆哲

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 宮庄 哲夫

副査： 文学研究科 教授 中山 善樹

副査： 聖学院大学教授（京都大学名誉教授）片柳 榮一

要 旨：

「西洋の教師」と称されたアウグスティヌスの思想は、キリスト教にとどまらず、西洋思想全体に影響を及ぼしたといえるが、その思想的根幹は神と自己についての探求であり、彼の生涯と思想を貫く真理の探求である。本論文は、その宗教的探求の方法や構造を明らかにすることをおして、アウグスティヌスの思想形成における真理探求のあり方に関心が向けられる。さらに彼の中心的問題である悪の問題、恩恵と自由意志の関係の問題を、その宗教的探求における「発展の相」のもとで究明することを目的とする。この課題を解明しようとする本論は、初期アウグスティヌス思想に関する膨大な研究の積み重ねを十分踏まえた上で、自らの立場を明確に表明しており、テキストの分析も堅実で洞察に満ちた所見が随所に見られる。

第一章「探求の基本構造」では、『告白』冒頭部のテキストの構造分析から、探求における信仰の先行性の強調、讃美が探求の目的のみならず、端緒でもあることを指摘する。第二章「教育と学習」では、プラトン以来の「照明説」が、キリスト教的に解釈され、単なる認識論を超えた神探求の道として神によって基礎づけられ、それ故に約束への信頼と希望のあることが明らかになる。第三章『「探求の秩序」としての信仰の知解』では、探求のあり方を根本的に決定づけた悪の問題を人類史的な視点にまで押し広げ、救済史的な観点から信仰への徹底が理性的探求を可能にすることが指摘される。第四章「悪の起源と構造の問題」では、悪の起源の問題のアポリアについて詳細な分析がなされ、それが無からの創造に基因する人間の背反意志の不可解な消極的運動であり、その矛盾を明らかにしつつ理論的・実践的に引き受けることが主張される。第五章「恩恵と自由意志」は最新の学会誌に掲載された論攷で、本論文の中で最も密度の濃い論述である。意志と自由および責任を確信していたアウグスティヌスの恩恵論では、信仰への意志も神から与えられると結論される。そこで「恩恵と自由意志と予定説の本質的な総合」を支える「相応しい呼びかけ」の思想が取りあげられ、神は人間の意志が拒否することがないような相応しい仕方、まさに恩恵において呼びかけることが示される。それが決定論でないことを、キリスト者の内的な「戦い」の分析をおして考察し、より深刻な罪の自覚へと開かれることによって、いっそう深化された戦いへと意志を純化する探求の道行きとして、意志と戦いが恩恵の下でなされることが強調される。第六章「愛と倫理の問題」では、「愛の秩序」の視点から倫理とその共同体的関心が論じられる。神への愛と隣人愛の間に肯定的な自己愛を介在させるアウグスティヌスの愛の教説に対するニグレンの批判への反論として、三種類の自己愛の分析を基に、「対立命題の克服 (Burnaby)」たる愛の動態、即ち、神の愛により神への愛へと、悪しき自己愛に戦う愛の主体としての自己のあり方が考察される。第七章「言葉と共同体」では、アウグスティヌスにおける聖書の解釈論とその記号論的な特性 (U.エーコ) が指摘される。共同体的関心をもつ宗教

的探求が、言葉と共同体の不完全性ないし解釈の危険性にもかかわらず、人間的生における逆説的意義がもつことが強調される。

本論文の意義は、以下の二点にまとめることができる。百年以上にわたる研究史において、それまで固定的教義のごとく考えられてきたアウグスティヌスの思想は、発展の相の下に捉えなおされてきた。論者はそれに対する揺り戻しともいえる最近の研究（アウグスティヌスはミラノの回心において、後に展開される思想を根本的にはすでに獲得していたとする）には批判的で、「宗教的探求」という視点で「発展の相」のもとに考察したことである。さらに論者の強調点は、宗教的探求における起点としての信仰にあり、アウグスティヌスにおける「真理探究」の方法は、権威信仰と理性的探求という「二つにして一つなる道」のうち、まず前者を徹底し、しかるのちに後者を可能な限り推し進めるという、明確な「信仰の知解」であったという。もっとも、アウグスティヌスにおいて何故、信仰は理性的探求にとって第一になくはならぬ必要な条件なのかに対する解明は本論文では必ずしも十分とはいえない。しかし、通常哲学的な視点から論じられることの多い初期のアウグスティヌスにおいても、隣みの神への信仰が何よりも彼を突き動かしていたものであることを精緻に論じた意義は大きい。

よって、本論文は、博士（哲学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2010年 2月27日

論文題目： 初期アウグスティヌス思想における宗教的探求の問題

学位申請者： 岡寄 隆哲

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 宮庄 哲夫

副 査： 文学研究科 教授 中山 善樹

副 査： 聖学院大学教授（京都大学名誉教授）片柳 榮一

要 旨：

上記審査委員3名は、2010年2月27日午後2時から約2時間にわたって、学位申請者に対して総合試験を行った。申請者は、提出された論文への質疑に対して的確かつ詳細に応答し、論文の学術的価値を実証した。哲学史やキリスト教思想など関連する分野についても、申請者が十分な理解と専門知識を有することが認められた。また、語学試験（ラテン語・英語）においても、研究上要求される運用能力を申請者が十分に有していることを確認した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 初期アウグスティヌス思想における宗教的探求の問題

氏名： 岡寄 隆哲

要旨： アウグスティヌスの生と思想は、深く探求的な性格により貫かれている。とりわけその特徴は、『告白(*Confessiones*)』(397-400年)執筆に至るまでの初期から中期の作品に色濃く表れる。彼の精神史上最も決定的な出来事は386年のミラノでの回心であった。彼にとってこの経験は、「神と魂との知」を求めるその生涯の道程中探求の終着を意味するのではなく、むしろそこで開示された道とその希望により、真の探求へと踏み出す契機として与えられるものである。しかしながらそこでの探求の方法は、それ自身最初から自明のものとして、彼の手中に収められていたものではなかった。総じて『告白』に至るまでのアウグスティヌスの思想的道程は、386年のミラノの出来事において、自己が出会い、経験し、その愛によりとらえられたところの神に対する、あくなき探求方法の模索であったと言える。すなわち筆者の解釈によれば、『告白』はアウグスティヌスにおいて、ミラノでの回心という彼の生と思索上の基礎経験を核としつつ、彼自身の探求の在り方を形成する諸原理の確定を俟って着手されたものに他ならない。アウグスティヌスはそこに至って初めて、十全な仕方で自己の経験の何たるかを了解するとともに、必要とされる宗教的探求の方法、およびその構造的実を確信し、回心以来十数年、満を持して『告白』の執筆にかかることができたのである。本研究の目的は、こうした展望の下に、神の恩恵を核としつつ、信仰と知解、および愛と自由により貫かれるアウグスティヌスの宗教的探求の在り方について、『告白』に至るまでの初期から中期にかけての著作を中心として究明するものである。

第1章「探求の基本構造 — 『告白』冒頭箇所をとおして —」では、『告白』第1巻冒頭部の祈りのテキストを取り上げ、そこにおいて認められるアウグスティヌスの神探求の基本構造を究明する。このテキストには、愛・信・知により貫かれるアウグスティヌスの宗教的探求の動態が、集約的な仕方ではっきりと表明されている。重層的な仕方では形成されるそこでの探求構造を正しく読み解くことにより、『告白』執筆までに確定されるに至った探求上の諸原理が明らかにされる。

第2章「教育と学習 — 初期アウグスティヌス思想における『照明説』を中心に —」では、『教師論(*De magistro*)』(389年)を中心テキストとして、教育・学習論の観点からアウグスティヌスの探求および学習理解について考察する。アウグスティヌスの教育・学習論は、新プラトン哲学の二世界論、および形相分有論を背景としたいわゆる照明説をとおして基礎づけられる。もっともその考え方は、アウグスティヌスによりさらにキリスト教的な仕方では解釈され直し、確かな約束の下での宗教的探求の道として示されることが明らかにされる。

第3章「『探求の秩序』としての信仰の知解 — 初期アウグスティヌス思想における悪の問題 —」では、アウグスティヌスの宗教的探求の方法、ないしはその秩序を根本より決定づけた悪の問題とそれへの取り組みについて考察する。アウグスティヌスは悪の問題に対する理論的、実践的対処として、カッシキアム時代の著作『秩序論(*De ordine*)』(386年)では、主として新プラトン哲学の世界観とそれに基づく理性的探求の道を提示していた。しかしながら『自由意志論(*De libero arbitrio*)』(388-395年)に至り、改めて信仰の知解の立場を鮮明にする中で、人間の意志を特別の焦点とするようになる経緯が明らかにされる。

第4章「悪の起源と構造の問題」では、アウグスティヌスにおける悪の問題への取り組みについて、改めて彼が新プラトン哲学より継承した「善の欠如」としての理解、および正統キリスト

教思想をとおして学んだ自由意志における「罪と罰」としての理解という二つの観点から考察する。その際とりわけ、両者の関係性を構造的に把握することにより、アウグスティヌスがとらえていた悪の問題の深淵が明らかにされる。

第5章「恩恵と自由意志 — アウグスティヌスにおけるキリスト者の戦い —」では、神の恩恵と人間の自由意志との関係性の問題について取り扱う。アウグスティヌスは先立つ『自由意志論』において、人間にとって「みずからの意志それ自身以上に、みずからにとって固有のものは他に何も無い」という徹底した意志・自由・責任の理解を確定していた。しかしながら390年代中頃に取り組みられたパウロ書簡研究とその最終的成果である『シンプリキアヌスへの手紙、種々の問題について(Ad Simplicianum de diversis quaestionibus)』(396年)において結論されるのは、人間は信仰への意志それ自身さえ神により与えられるとする解釈である。意志と恩恵はこの場合どのように関係し合うのであるか。宗教倫理思想上の根本問題であるこの問いに対し、本章ではアウグスティヌスが終生奨励し続けた「キリスト者の戦い」という観点より接近し、究明する。

第6章「愛と倫理の問題」では、アウグスティヌスにおける愛の理解とそれを軸として形成される倫理体系、および神—人間関係について考察する。アウグスティヌスにとって宗教倫理思想の全体は愛の問題に収斂する。神を中心として形成される正しい「愛の秩序(ordō amoris)」においてこそ、個人の徳、および真の共同体的関係は実現される。恩恵と自由意志の関係性についての問題も、神の愛と神への愛という愛を焦点として両者の関係性がとらえられることにより、より正しい理解へと導かれることが明らかにされる。

第7章「言葉と共同体の問題 — 『キリスト教の教え』を中心に —」では、『キリスト教の教え(De doctrina christiana)』(396年)を中心テキストとして、アウグスティヌスの解釈論、および共同体論について考察する。アウグスティヌスにとって宗教的探求はつねに共同体論的に、ないしは共同体的関心において引き受けられ、遂行される。その際重要な問題となるのは、言葉を中心とした相互間の伝達媒体、およびその解釈についてである。記号の解釈に際しアウグスティヌスが見定めていた種々の危険性について明らかにされるとともに、そうした解釈の迂路、および教育関係においてこそ彼がとらえていた共同体形成の道が展望される。

以上の論究をとおして、『告白』執筆までに確定されるアウグスティヌスにおける宗教的探求の形成原理、ないしその構成要素は、簡潔に分節化して取り出すとすれば、以下のような内容として示されることになる。まず新プラトン哲学の世界観と形相分有論を基にした理性的探求の道である。これは回心直後のカッシキアム時代に特に顕著な方途であり、キリストへの信仰を支えとしながらも、主として理性的判断、訓練をとおして、「造られたもの」から「造ったもの」へ、「合理から神秘」へと上昇的に探求を推し進める *disciplina* の道行きである。次に、悪の問題への取り組みが深められる中で、「あなたがたは信じなければ知解しないであろう(*nisi credideritis, non intellegetis*)」(イザヤ7:9)の指示の下、『自由意志論』および『信の効用(*De utilitate credendi*)』(391年)においてはっきりと打ち立てられることになる「信仰の知解(*intellectus fidei*)」の立場である。実際これ以降、アウグスティヌスは司祭叙階とも重なり、自由学芸よりも聖書釈義を、自身の探求、知解の中心課題として従事していくようになる。最後に、パウロ書簡の学びを通じて、最終的に『シンプリキアヌスへ』において確定されることになる恩恵論である。

アウグスティヌスの宗教的探求の形成原理として上に分節化して示した三つは、大筋においてカッシキアム時代から391年の司祭叙階、396年の司教就任という仕方で、段階的に彼のうちで自覚化されていったものと言える。もっとも、注意しなければならないのは、回心以来のアウグスティヌスの思想的道程において、先に自覚化され、自身の原理として確信され確定された探求の方途は、後に自覚化され、深められたものによって基本的に覆されることはないという点で

ある。新プラトン主義的世界観、および哲学的な事柄と宗教的な事柄とがその目的において合一するという基本理解は、アウグスティヌスにおいて終生貫かれるものであり、それ自体は信仰論的、恩恵論的な解釈、立場によって駆逐されるのでは決してない。また、悪の問題に面して明確に示された意志と責任理解の立場は、その後のパウロ書簡研究、および司牧経験の中で深められていく自由意志そのものについての無力さと徹底恩恵主義の立場により手放されるのでは決してない。アウグスティヌスは自身が確信し確証したところの自由意志とその責任の理解そのものを、終生いかなる場合にも手放さなかった。むしろそれを徹底的に保持したからこそ、同時にその無力さの自覚を介して、徹底的な恩恵論の理解へと導かれえたのである。アウグスティヌスの宗教的探求の理解において、恩恵は意志による努力を否定せず、それを戦いの場所としてこそ有意味に、かつ劇的に語られるのである。それは根本において、神の愛により、より純なる仕方での神への愛へと赴く自己自身における戦いであった。